

Title	知覚はどれだけのものを捉えられるのか
Sub Title	How many kinds of items can we perceive?
Author	源河, 亨(Genka, Toru)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2013
Jtitle	哲學 No.130 (2013. 3) ,p.165- 184
JaLC DOI	
Abstract	<p>When we perceive something, we can be aware of many items. For example, we can be aware of low-level properties such as object's color, shape, motion and place. Also we can be aware of highlevelproperties or features such as causal relation, disposition, kindproperty, mental state of others, absence of something, and affordance. Among these properties, which ones are we aware of by perception, and which ones by thought(interpretation, judgement, inference)? Low-level theorist claims that we can perceive only low-levelproperties, and that we are aware of high-level properties bythought. On the contrary, high-level theorist claims that we can perceivesome high-level properties in addition to low-level properties. This paper aims to show that the low-level theory is false. First, I show that reasons which support the low-level theory, in themselves, are not enough to exclude high-level properties from perceptual content. Next, I explain that phenomenal difference between expert and novice suggests that expert's perceptual content include high-levelproperties. But low-level theorist can object this difference can beconstrue not as high-level- but as the difference of low-level propertiesperceived. To reply this objection, I argue that some cases of agnosiasuggest perceptual content has non-low-level property. Finally, I consider what is needed to regard this non-low-level property ashigh-level property.</p>
Notes	特集：渡辺茂君・増田直衛君退職記念 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000130-0165

てご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

知覚はどれだけのものを捉えられるのか

源 河 亭*

How Many Kinds of Items Can We Perceive?*Tohru Genka*

When we perceive something, we can be aware of many items. For example, we can be aware of low-level properties such as object's color, shape, motion and place. Also we can be aware of high-level properties or features such as causal relation, disposition, kind property, mental state of others, absence of something, and affordance. Among these properties, which ones are we aware of by perception, and which ones by thought (interpretation, judgement, inference)? Low-level theorist claims that we can perceive only low-level properties, and that we are aware of high-level properties by thought. On the contrary, high-level theorist claims that we can perceive some high-level properties in addition to low-level properties. This paper aims to show that the low-level theory is false. First, I show that reasons which support the low-level theory, in themselves, are not enough to exclude high-level properties from perceptual content. Next, I explain that phenomenal difference between expert and novice suggests that expert's perceptual content include high-level properties. But low-level theorist can object this difference can be construed not as high-level- but as the difference of low-level properties perceived. To reply this objection, I argue that some cases of agnosia suggest perceptual content has non-low-level property. Finally, I consider what is needed to regard this non-low-level property as high-level property.

* 慶應義塾大学文学研究科 (哲学)

知覚はどれだけのものを捉えられるのか

1. はじめに

いま私は、机の上にあるパソコンを使って原稿を書いている。机の端の方には、コーヒーが入った白いマグカップが置いてある。このままでは何かの拍子に机から落ちてしまいそうだなと思いはしたが、特に何もせず画面に注意を向け、再び原稿を書く。しばらく後でふとコーヒーを飲もうと思ひ、画面の方を向いたままマグカップに手を伸ばす。マグカップに触れてみると意外に熱く、思わず手を離してしまう。マグカップは地面に落ち、そのせいで割れてしまった。床にマグカップの破片とコーヒーが広がる。

このような出来事を経験するとき、私たちはさまざまな物事に気づく。別の言い方をすれば、さまざまな物事が私たちの意識に現れている。たとえば、白いマグカップを見たとき私たちは、「白い・円筒形をしている・取手がついている・マグカップである」ということに気づき、それが机の端にあるのを見たときには、「机から落ちそうだ」ということにも気づく。そして、そのマグカップが地面に落ちて割れたのを見たときには、「地面に落ちたために割れた」ということにも気づくだろう。

では、私たちが気づくことができるこのようなさまざまな物事のうち、どれが知覚されたものであり、どれが解釈・判断されたものなのだろうか。たとえば、「マグカップである」ということはどうだろうか。私たちは、白という色を知覚して「これは白い」と気づいたり、円筒形という形を知覚して「これは円筒形をしている」と気づくのと同じように、「マグカップである (being a mug)」という種性質 (kind property)¹を知覚して「これはマグカップだ」と気づいているのだろうか。それとも、知覚できるのは「白い・円筒形をしている・側面に半分の高さの輪っか状のものがついて

¹ 「種性質が知覚できるか」という問題は、水や虎、リンゴなどの自然種 (natural kinds) だけでなく、ここで挙げたマグカップのような人工種 (artificial kinds) についても議論されることもある。Siegel (2010), Macpherson (2011) 参照。

いる」ということだけであり、私たちはそれに何らかの解釈を加えて、「これはマグカップだ」と判断しているのだろうか。同様に、「机から落ちそうだ」という傾向性や、「地面に落ちたために割れた」という因果関係についてはどうだろうか。これらの物事は知覚されたのだろうか。私たちが知覚によって気づいた物事を知覚内容 (perceptual content) と呼ぶならば、ここでの問題は「知覚内容はどれほどのものを含みうるか」ということである^{2,3}。

知覚内容に含まれるのは、対象とそれがもつ色や形、大きさ、位置、運動などの感覚的ないし基礎的な低次の性質のみであると主張する立場は、知覚内容についての**低次説** (low-level theory) と呼ばれる。この立場では、私たちが何かを知覚した際に気づくことができる低次性質以外の高次の性質や特徴 (上記の種性質、傾向性、因果関係の他に、「あの人は怒っている」のような他者の心的状態、「ここに置いておいた自転車がない」といった何かの不在、「この椅子には座ることができる」といったアフォーダンスなど) は知覚されたものではなく、知覚された低次性質をもとに解釈・判断されたものだと考えられることになる (あるいは、低次性質だけが直接的に知覚され、高次性質は思考を媒介として間接的に知覚される、と言われることもある)。これに対し、低次性質だけでなく高次性質⁴ (の

² この問い方は、知覚経験は内容をもつという内容説 (content view) を前提としている。知覚経験は内容をもつものではなく、むしろ、対象と現前的関係を結ぶことであると考えられる関係説 (relational view) では、同じことを「知覚はどれほどのものと現前的関係に立ちうるか」という仕方でも問うことができるだろう。以下で展開される議論は、内容説に特有の仕方でもなされているわけではないので、関係説とも両立する。

³ 意識的に現れない知覚内容も存在しているだろうが、本稿はもっぱら一人称的に意識できる知覚内容を問題にする。したがって、本稿での「知覚内容」は、「現象的内容 (phenomenal content)」と同一のものを意味する。

⁴ 因果関係や心的状態、不在は性質ではないが、慣用にしたがって (Byrne 2009; Crutchfield 2011; Fish forthcoming; Macpherson 2011)、また省略のために、他のものとまとめて「高次性質 (high-level property)」と呼ぶことにする。

知覚はどれだけのものを捉えられるのか

うちの少なくともどれか一つ) も知覚内容に含まれうると主張する立場は、知覚内容についての**高次説** (high-level theory) と呼ばれる。

本稿の目的は、タイトルにある通り、「知覚はどれだけのものを捉えられるのか」ということを検討することである。とりわけ、私たちが気づく、言い換えれば、私たちの意識に現れる物事に注目しつつ、この問題を検討してみよう⁵。また、色や形、運動や位置といった低次性質が知覚されるということは多くの場合問題なく認められるので、本稿は、それ以外のものが知覚できるのかということに焦点を当てることにしよう。先ほど導入した用語を用いて言うならば、本稿の目的は、私たちの知覚内容には、低次説が主張するように低次性質だけが含まれるのか、それとも高次説が主張するようにさらに高次性質が含まれているのか、ということを検討することである。そして本稿で私は、低次説が正しくないという議論を行う。

本稿の構成を述べておこう。2節では、低次説を支持し高次説を拒否する理由としてどのようなものがあるかを検討する。そして3節では、まず、2説で述べた理由は知覚内容について正当化されていない前提を用いているため、高次説を拒否するには十分ではないということを示す。次に、主体がもつ知識の違いに応じて知覚内容が異なるという事例から、高次説を支持することができるということを説明する。そして4節では、3節で紹介した事例は低次説とも両立するため、高次説を支持するには不十

⁵ 意識的な側面を扱うのは、まさに私たちの知覚が意識的なものだからであり、そのため、意識的な側面についての考察は私たちの知覚を理解するために避けては通れないものだからである。もちろん、「意識が伴わなければ知覚ではない」というわけではない。たとえば、盲視の患者は視覚的な意識をもつことなしに視覚を使って何かを知覚しているのかもしれないし、また、意識を持っているかどうか疑わしいような虫などの生き物でも何かを知覚していることは疑えない。このような意識なしの知覚と私たちのような意識を伴う知覚とは、おそらく何かを共有しており、その解明は部分的に私たちの知覚の解明に寄与するはずである。しかし、意識的な側面を解明することなしに、私たちの知覚を明らかにしたことはならないだろう。

分であるという低次説からの反論を検討する。そしてこの反論に応えるため、失認症の事例を検討し、知覚内容には低次性質には還元されないような要素が含まれ、そのため、低次説は誤っていると主張する。最後に5節では、これまでの議論をまとめ、高次説についての展望を述べる。

2. 低次説を支持する理由

最初に述べたように、私たちは何かを知覚することによって、そこに存在しているさまざまな物事に気づく。マグカップを見ることによって私たちは「これはマグカップだ」と気づき、マグカップが地面にぶつかって割れるのを見て「地面に落ちたせいで割れた」と気づく。もしマグカップを見ていなければ「マグカップである」ということに気づくこともなく、マグカップが地面に落ちて割れるのを見なければ「地面に落ちたせいで割れた」と気づくこともなかっただろう。また、そのような物事に気づいたとき、目の前には実際にマグカップである対象が存在しているし、それが地面に落ちたせいで割れたという因果的な出来事も実際に起こっている（それが知覚されているのかどうか問題となっている）。これらの点に関しては、高次性質も低次性質も同じである。私たちは、白いマグカップを見て「これは白い」と気づくが、もしそのマグカップを見ていなければ「これは白い」と気づくこともなかっただろう。そして、「これは白い」と気づいたときに、そこには実際に白さをもつ対象が存在している。低次性質も高次性質も、**私たちが何かを知覚したときに気づくものであり、もしその何かを知覚していなかったならば気づかなかったようなものである**。さらに、低次性質も高次性質も、**私たちが何かを知覚してそれが存在することに気づくときに、実際にそこに存在しているものである**⁶。

⁶ (1) もし何かを知覚していなければ X が意識に現れることはなかっただろう、ということと、(2) 意識に現れた X はそのとき主体のまわりに実際に存在している、ということは、X の意識への現れが知覚であるための必要条件だと言える（もちろん、これだけでは十分ではない）。たとえば、カレーのにおいを嗅い

知覚はどれだけのものを捉えられるのか

低次性質と高次性質にはこのような共通点があるにもかかわらず、低次説は、低次性質のみが知覚されたものであり、高次性質は知覚された低次性質をもとに判断されたものであると主張する。では、なぜ高次性質は知覚されたものではないと考えられるのだろうか。

たとえば、次のような考えがあるかもしれない。本物とそっくりなリングの食品サンプルを見ている場合を考えてみよう。それが食品サンプルであるということを知らなければ、私たちはおそらく、「赤くて丸いリングがある」と気づくだろう。また、皮をむいてサイコロのような形に切ったリングを見る場合を考えてみよう。それがリングであるということを知らなければ、このとき私たちは、「白くて立方体のものがある」ということに気づくだろうが、「これはリングである」ということには気づかないだろう。これら二つの事例において私たちは、対象の色と形がどのようなものであるかについては正しく気づいている。最初の事例では「赤くて丸い」ということに正しく気づいているし、後の事例では「白い立方体」ということに正しく気づいている。一方で私たちは、対象がリングであるかどうかについて正しく気づいていない。リングらしい色や形をしているものを見れば、それがリングでなくても「これはリングだ」と誤って気づいてしまうし、逆に、リングらしい色や形をしていないものについては「これはリングだ」と気づくことができない。このような事例から、色や形などの低次性質は知覚されたものであるが、知覚それ自体は「対象がリングであるかどうか」を捉えることができないと考えられるのではないだろうか。

だときにインドの光景が頭に浮かぶ場合を考えてみよう。もちろんこれは知覚ではない。この場合も、カレーのにおいを知覚しなければインドの光景が頭に浮かぶことはなかっただろうというような仕方で (1) が満たされている。だが、その主体はインドにいない (ことにする) ので、(2) は満たされない。そして、ここで問題となっている高次性質への気づきは (1) と (2) をともに満たしている。高次性質への気づきは、真正な (veridical) 知覚がそうであるように、外界に成り立っている事実と一致しているのである。

しかし、高次性質について誤って気づいてしまう場合があることは、高次性質を知覚内容から排除するための十分な理由とはならない。というのも、色や形といった低次性質についても誤って気づいてしまう場合があるからだ。たとえば、かなり特殊な照明のもとで赤いリングを見て、「紫色のボールがある」と気づいてしまう場合を考えてみよう。実際に目の前にあるのは赤いリングであるため、このとき対象について気づいたことのうち、「紫色をしている」も「ボールである」も誤っていることになる。上と同じように、誤って気づく可能性があるものは知覚されたものではないと考えるならば、知覚は「対象がリングであるかどうか」だけでなく、「対象が何色をしているか」も捉えることはできないという帰結が導かれるだろう。つまり、高次性質について誤る場面があるということから高次性質が知覚不可能であることが導かれるならば、同様に、低次性質についても誤る場面もあるため、低次性質も知覚不可能だという帰結が導かれることになってしまうのである。さらに言えば、ある性質について誤って気づくことがあるということからその性質が知覚不可能であるという帰結が導かれるならば、知覚されうる性質の中で誤りの可能性がないものなどおおよそ存在しないため、全ての性質が知覚不可能だという帰結が導かれることになるだろう。もちろんこれは信じ難い。したがって、誤って気づく場合があるということ自体は、高次説を拒否する理由としては不十分だと言えよう。

では、誤りではない場合はどうだろうか。たとえば、次のような場面を考えてみよう。リングがどういうものか知っている人（知覚している対象についての知識をもっている人を、以下、「熟達者」と呼ぶ）と、これまで一度もリングを見たことがない人（以下、「素人」と呼ぶ）が、同じリングを見ている場面を考えてみよう。二人の眼には同じ対象から反射された同じような光が入り、そして、二人の視覚システムは正常に機能しているとしよう。そのため、二人はともに同じリングを正しく知覚しているこ

知覚はどれだけのものを捉えられるのか

とになる。しかしこのとき、熟達者は対象を知覚することで「赤い・丸い立体である・リングである」ということに気づくのに対し、素人は「赤い・丸い立体である」ということにしか気づかない。というのも、当然のことだが、知覚されたものが「リングである」ということに気づくためには、リングがどのようなものであるかについての知識が必要であるからである。一方で、二人とも同じリングを正しく知覚している以上、二人の知覚内容は同じであると考えるのはもっともらしいように思われる。このことから、知覚内容に含まれているのは、二人が共通して気づく「赤い・丸い立体である」という低次性質だけであると考えられるのではないだろうか。そして、熟達者だけが気づくことができる「リングである」という高次性質は、知覚された低次性質と知識とを照らし合わせて判断されたものだと考えられるのではないだろうか。

一般的に言うならば次のようになるだろう。素人と熟達者が同じ対象を正しく知覚していても、そのとき二人が気づく内容は異なっている。素人は低次性質にしか気づかない一方で、熟達者はさらに高次性質に気づいている。しかし、同じ対象を正しく知覚している以上、両者の知覚内容は同じだと考えられる。このことから、両者が共通して気づく低次性質だけが知覚されたものであると考えられる。そして、熟達者だけが気づいた高次性質は、知覚された低次性質と知識とを照らし合わせて判断されたことだと考えることができる。このような考察から、知覚内容には低次性質のみが含まれるという低次説を支持することができるのではないだろうか。

3. 知覚内容の差異

低次説を支持する考察の中で重要なのは、「正しく知覚しているならば、熟達者も素人も知覚内容は同じである」という考えである。より詳しく言うならば、「対象から二人の主体の感覚器官への物理的入力（反射光や音波など）が同じであり、かつ、二人の知覚システムが正常に機能している

ならば、そのとき二人がもつ知覚内容は同じである」ということになるだろう。この主張が正しいならば、「たとえ主体がある対象について何らかの知識をもっていたとしても、その知識自体は、その対象を知覚して得られる内容に影響を与えない」という主張が導かれる。というのも、知覚内容に何が含まれるのかは、物理的な入力と知覚システムが正常に機能しているかどうかによって決定されるものであり、知識とは無関係であることになるからだ。これらの主張によって、熟達者だけが気づく高次性質が知覚内容から排除されることになる。

しかしながら、これらの主張はそう自明なものではない。たとえば、ある外国語に習熟する前と後を比べてみよう。初めてその言語を聴くときには発話の意味が全く理解できなかったのが、ある程度習熟してくると理解できるようになってくる。しかし、習熟する前後で異なっているのは、その言語の発話が理解できるかどうかだけだろうか。それに加えて、発話の聴こえ方も異なっているのではないだろうか。つまり、その言語を習得する前と後では、同じ発話が提示され（物理的に同じ音波が耳に入り）、どちらでも主体の知覚システムが正常に機能していたとしても、その対象を知覚している主体の一人称的な観点からすれば、聴こえている音が異なっているように思われるのではないだろうか⁷。そして、この違いは、知覚内容の違いに由来するものであると考えることができるのではないだろうか。つまり、**たとえ同じ対象を正しく知覚していたとしても、主体のもつ知識や技術の違いに応じて、知覚内容が異なると考えられるのではないか**ということである (O'Callaghan 2011; Siegel 2010)。

発話の場合とはくに、知識が知覚内容に与える影響が顕著である。たとえば、劣化雑音音声 (Noise-vocoded speech sounds) の知覚を取り上げて

⁷ その文字を見たり発話を聴いたりする経験の現象的性格 (phenomenal character) が異なっている、ということである。

知覚はどれだけのものを捉えられるのか

みよう (Shanon *et al.* 1995; 柏野 2010, 33-34; 力丸 2005)⁸。劣化雑音音声とは、音声信号の振幅包絡（振幅のゆるやかな曲線）を抽出し、信号成分のいくつかの周波数帯の雑音に置き換えたものである。このことによって周波数帯の構造は破壊され、モザイクをかけた映像のような信号になる。このような音をそのまま聴くと、単なる雑音にしか聴こえず、それが発話であるかどうかさえも理解することはできない。しかし、加工前の原音を聴き、もう一度モザイク音を聴くと、今度はそれがどういう内容の発話であるのかがとたんに理解できるようになる。それに加えて、一度原音を聴いた後では、最初に聴いた音と同じであるということが信じられないほどにモザイク音の聴こえ方が変化してしまうのである。

ここで重要なのは、一度原音を聴くことによって、以前は雑音にしか聴こえなかったものが発話として聴こえるようになる、という変化があるということである。つまり、単に発話の内容が理解できるようになっただけでなく、音の聴こえ方そのものが変化してしまったことがみて取れるのである。このことは、主体が知識（原音がどんな音声であるか）をもつ前と後とで、聴覚的な知覚内容が変化してしまったことを意味しているのではないだろうか⁹。もしそうであるならば、低次説の「知覚内容は感覚器官への物理的入力と主体の知覚システムが正常に機能しているかどうかによって決定されるため、主体がもつ対象についての知識は知覚内容に影響を与えない」という主張は誤りであるということになるだろう。

⁸ 劣化雑音音声については、<http://www.asj.gr.jp/2005/data/61050273/>や、http://www.brl.ntt.co.jp/illusionForum/a/noise_vocodedSpeech/ja/でデモを体験することができる。

⁹ 原音を聴く前後の経験には現象的な差異があり、その差異は知覚内容の差異によって説明されるのではないか、ということである。これに対し、現象的な差異を認めつつも、その差異は知覚内容以外のもの（たとえば、思考がもつ現象的性格、対象への親近感、クオリアなど）によって説明することも可能ではないか、という反論もある (Butterfill 2009)。紙幅の都合上ここでは扱えないが、この反論に対する再反論は Siegel (2010) で詳細に扱われている。

さらにここで高次説論者は、このような知覚内容の変化を次のように説明するだろう。一度原音を聴きもう一度モザイク音を聴いた主体は、単に音声の内容が理解できるようになっただけでなく、その音が「発話であること」を知覚することができるようになったのではないだろうか。言い換えれば、知識をもつことによって主体は、その音をもつ「発話である」という高次性質が知覚可能になり、その結果、知覚内容が変化してしまったと考えられるのではないだろうか（たとえば、Siegel 2006, 2010）。

聴覚は知覚内容の変化が目立ちやすい事例であるが、知識や技術をもつことによって知覚内容が変化するということは、他のモダリティについても言うことができるだろう。リングを見る場合も同様に、熟達者は、リングについての知識をもっていることによって、素人とはリングの見え方が異なっているのではないだろうか（リングは特徴が比較的単純なものであるので、もっと複雑な形や色をしたもの場合にはより明確な見え方の変化があるかもしれない）。そして、この見え方の差異は、知覚内容に「リングである」という高次性質が含まれているかどうかの違いであると考えられるのではないだろうか。

ここまで述べてきたことを一般的に言うと、次のようになるだろう。ある対象についての知識をもつ前とその後では、その対象についての理解だけでなく、知覚内容そのものにも変化が生じていると考えられる。そしてこの知覚内容の変化は、知識をもつことによって、以前は知覚できなかった高次性質が知覚できるようになったために生じたと考えられることができる。このことから、高次説が主張するように、私たちは高次性質を知覚することが可能だと考えられるのではないだろうか。

4. 知覚内容は低次性質に還元できるか？

しかしながら、低次説論者は次のように反論することができる。確かに、熟達者は素人よりも多くの性質を知覚することができ、そのことに

知覚はどれだけのものを捉えられるのか

よって、同じ対象を知覚したとしても、素人とは知覚内容が異なっているかもしれない。しかしだからといって、熟達者は素人が知覚できない**高次性質**を知覚しているという結論は導かれない。というのも、熟達者と素人の知覚内容が異なるのは、熟達者は知覚対象に対する注意や視線の向け方が素人よりもきめ細かく、そのため、素人よりも多くの**低次性質**を知覚しているからだとも考えることができるからである。そして、素人が高次性質に気づけない一方で熟達者は気づくことができたことは、熟達者は素人が知覚できないような（しかしながら、対象が何であるかを判断するために重要な）低次性質を知覚することができ、その低次性質を何らかの仕方で解釈したのだ、とも考えることもできるだろう。つまり、素人と熟達者で知覚内容が異なることを認めたとしても、依然として低次説を維持することができるのである。したがって、熟達者と素人の知覚内容に差異があること自体は、高次説を支持する理由とはならない¹⁰。

この反論に再反論する一つの方法は、素人と熟達者の知覚内容の差異は低次性質だけでは説明できない、言い換えれば、**知覚内容には低次性質に還元されないものが含まれている**ということを示すことである。もし知覚内容に低次性質に還元されないものを含まれているならば、そのときに含まれているものは高次性質であると考えられるのではないだろうか。以下ではそのような方針で議論していこう。たとえば、Bayne (2009) は視覚性の連合型失認 (associative agnosia) (以下では省略のために「失認症」と表記する) の事例を用いて知覚内容に高次性質が含まれているという議論を行っているが、以下で本稿も失認症の事例について検討してみよう。そして本稿は、失認症は、低次性質の知覚能力が維持されている一方で低次性質に還元されない要素を知覚する能力が欠けている選択的障害

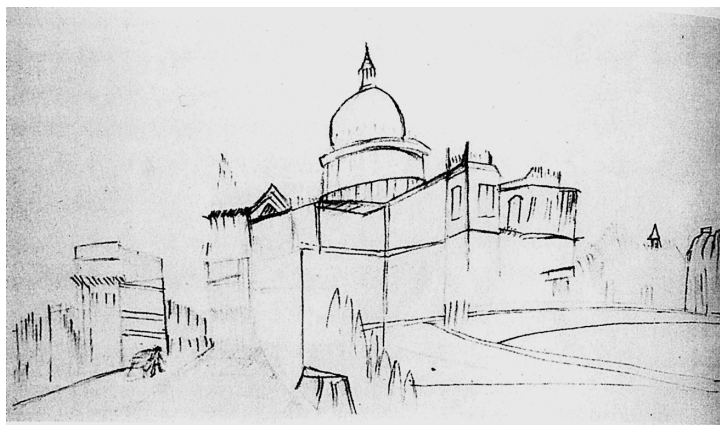
¹⁰ この反論は Crutchfield (2011) を参考にした。ただし Crutchfield 自身は高次説論者であり、以下で展開される議論とは異なる仕方（認知浸食性 cognitive penetrability を積極的に認めるという仕方）で高次説を擁護している。

として解釈できる、と主張する。そして、このような選択的障害があると考えられることから、知覚内容には、低次性質とそれに還元されないものの（少なくとも）二種類が含まれていると考えなければならないと主張する。

失認症とは、脳の視覚野の損傷により生じる障害であり、以前から慣れ親しんだ対象を見ても、それが何であるかを同定することができなくなった状態のことである（もちろん、V1からV5の損傷の度合いに依存して障害の度合いが異なる）。このような障害があるにもかかわらず、こうした患者の一部は、同定できなくなった対象がどのようなものであるかについての記憶や知識をもっている。たとえば、ある患者はニンジンを見てもそれがニンジンであることがわからないのだが、ニンジンとは何かと尋ねられると、「世界中で人間の食用に栽培されている根菜で（中略）根っこの部分はだいたいにおいて細長い円錐形の形をしていて、色は赤と黄色の間でいろいろ違っています」（Humphreys and Riddoch 1987; 邦訳: 112）と答えることができる。さらに、同定できない対象の絵を記憶にもとづいて描くこともできるし、目の前にある風景を（もちろん同定はできていないが）模写することもできる（図1）。これらのことから失認症は、知覚や知識、記憶のための能力が保持されている一方で、知覚した物事と記憶や知識とを照らし合わせて判断あるいは理解する能力に障害が起こっている事例だと考えられることもある。

だが、失認症が単なる判断や理解の障害であることに疑問に疑問を投げかける神経科学者もいる（Humphreys and Riddoch 1987; Russell 1941 Zeki 1993）。その理由の一つは、失認症患者に関する多くの報告が、患者の絵の描き方が切れ切れであるという点で一致していることである。患者たちは対象の小さな部分だけを描き、それを機械的に繋げていっているため、出来上がった絵はとても正確なものである。しかし患者は、絵が**全体**として何を意味しているかを理解することができない。また、ある失認症

知覚はどれだけのものを捉えられるのか



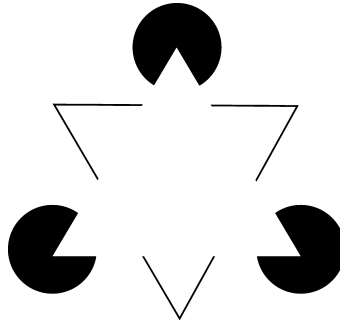
失認症患者のスケッチ.

Humphreys and Riddoch (1987, 邦訳:124) より抜粋.

図1

の患者は主観的輪郭を見ることができず、図2のようなカニツツアの三角形を見た際に、「三つの角のあるもの... 三つのエッジと三つの円が見える」(Zeki 1993, 邦訳: 324) と報告している。これらのことから考えられるのは、失認症患者は、対象の部分を知覚することができるが、その部分からなる**全体としてのまとまり**を知覚する能力が欠如している、ということである。

「全体としてのまとまり」がどういうことを意味しているかについては、注意が必要である。それは、単なる「対象全体の形」とは異なる。というのも失認症患者は、障害物をよけたり、手を伸ばしてものを掴んだりするなどの日常的な行動をすることができ、そのため、対象全体の形についてのおおまかな情報を得ていると考えられるからである。ある失認症患者についてさまざまな視覚認知実験を行った Humphreys and Riddoch (1987) は、その失認症患者が不可能なことは、「対象全体と部分間の関係を同時に完全な像にまとめあげること」(邦訳: 141) だと述べている。また別の



カニツアの三角形。
図 2

ところでは、失認症患者が「個々の特徴を「束ね上げる」過程に重度の障害をもっているにもかかわらず全体のパターンを知覚できるという事実は、そこに異なった過程の関与があることを示唆している」(邦訳: 136)と述べている。つまり、彼らが述べているのは、「対象全体の形」の知覚と「全体としてのまとまり」の知覚は異なる過程を経て成立するものであり、そして失認症は、前者は可能であるが後者が不可能な選択的障害だと考えられる、ということである。

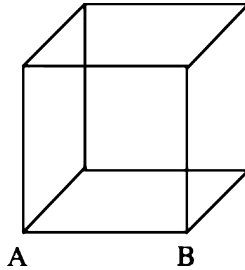
「全体としてのまとまり」と「全体の形」の違いをより明確に理解するためには、反転図形の知覚を考えるのが有効だろう。

図3は、ウサギにもアヒルにも見える反転図形である。このような図を見ると、私たちは確かにウサギに見えることからアヒルに見えることへの反転を経験するが、ウサギに見えているときとアヒルに見えているときとで図の形が変化してしまうわけではない。見えるものが変化してしまったからといって、全体の面積の増減があったり、いままで曲線だったものが直線になったりするわけではない(もちろん、色などの他の低次性質も変化しない)。そこにおける変化はむしろ、ウサギに見えているときには耳に見えていたでっばりが、アヒルに見えるときはくちばしに見えるというも

知覚はどれだけのものを捉えられるのか



ウサギ-アヒルの反転図形.
Macpherson (2006) より抜粋.
図 3



ネッカーの立方体.
Macpherson (2006) より抜粋.
図 4

のである。図4のネッカーの立方体も同様である。私たちがこの図を見て反転を経験するとき、そこで変化しているのは対象の形ではなく、線分ABが手前にあるように見えるかそれとも奥にあるように見えるかということである。つまり、これらの図の知覚における変化は、全体としての形の変化ではなく、それぞれの部分が全体の中でどのような部分としてまとめられるかということである。言い換えれば、反転図形を見た際に経験する反転とは、「全体と部分の関係」あるいは、「部分が全体の中でどのように位置づけられるか」ということ、つまり、**ゲシュタルト**の変化である。

「対象全体の形」と「全体としてのまとまり」あるいはゲシュタルトは、以上のような仕方で区別されるものである。そして、失認症患者の事例から示唆されるのは、この二つの知覚が異なる過程を経て成立するものであるということである。素人と熟達者の知覚内容も、ゲシュタルトの違いに訴えて説明することができる。たとえば私たちが図3を見たときこの図はウサギにもアヒルにも見えるが、ウサギもアヒルも見ることがない人が見たときには、ウサギにもアヒルにも見えないだろう。この違いは、たとえば、私たちは左側のでっぱりをくちばしや耳として位置づけられるが、初めて見た人はそれができない、ということに由来すると考えることができる。

以上のことから、ゲシュタルトは、低次性質である「対象全体の形」とは異なった仕方で知覚され、さらに、知覚内容としても区別されるものだと考えることができる。そのため、知覚内容には低次性質に還元することのできないものが含まれている、と考えることができるだろう¹¹。したがって、知覚内容に含まれるものは低次性質のみであると考えられる低次説は誤っていると考えることができるのではないだろうか。

5. まとめと展望

本稿で行った議論をまとめよう。まず2節では、高次説を拒否し低次説を支持する理由としてどのようなものがあるかを検討した。それは、熟達者と素人が同じ対象を正しく知覚したときに共通して気づく内容は低次性質のみであるということから、知覚内容に含まれるのは低次性質のみだと

¹¹ 高次説を擁護する Siegel (2006: 499) は、知覚内容の差異がゲシュタルトで説明できるという考えを拒否しているが、彼女は「ゲシュタルト」で「色や形の複合体 (color-shape complexes)」を意味している。そして、色や形が同じままで現象的内容の変化が可能であるという理由から、現象的内容の変化はゲシュタルトでは説明できないと主張している。しかし、これまで述べてきたゲシュタルトは、反転図形の例からわかる通り、色や形が変化せずとも変化するようなものである。

知覚はどれだけのものを捉えられるのか

考えられる、というものであった。3節ではこれに対し、熟達者と素人とは、同じ対象を知覚しても知覚内容に差異がある事例を挙げ、そして、その差異は熟達者のみが高次性質を知覚したことによって説明されるのではないか、ということ述べた。4節では、熟達者と素人の知覚内容の差異は低次性質のみによって説明できるのではないか、という反論を説明し、それに再反論するため、失認症の事例を検討し、知覚内容には低次性質には含まれないゲシュタルトが含まれている、と主張した。

知覚内容には低次性質には還元されないゲシュタルトが含まれているという点で、知覚内容に含まれるのは低次性質のみであると主張する低次説は誤っていることになる。だが、このことは高次説が正しいことを示しているのだろうか。それは、「高次性質」をどのように定義するかに依存している。もし「高次性質」が単に「低次性質以外の性質」を指しているならば、本稿の議論は、高次説が正しいものであると示すのに十分である。しかし、高次説が、最初に挙げたような、種性質、因果関係、傾向性、不在、心的状態が知覚可能だと主張する立場であるならば（むしろ、高次説が意図しているのはこちらだと思われるが）、本稿の議論は高次説が正しいと示すのに十分ではない。というのも、ゲシュタルトを知覚することと種性質や因果関係を知覚することをいかなる意味で同一視できるのか、という点が明らかにされていないからである。たとえば、もし「対象がもつリング性」と「対象がリング性をもっていることによって付随的にもつリング特有のゲシュタルト」という存在論的な区別が存在するならば、リング特有のゲシュタルトを知覚することは、リング性を表象している性質の知覚であるかもしれないが、リング性そのものの知覚ではないということになるだろう。したがって、高次説を擁護するためにはさらに、知覚内容に含まれているゲシュタルトと対象がもっている高次性質の存在論的本性はどのような関係にあるのか関する考察が必要だと言えるだろう。

また、最初に述べたように本稿は、意識的な側面に注目して「知覚はど

れほどのものを捉えられるか」という問題を検討してきた。だがもちろん、この問題は意識に言及しない他のアプローチによっても問うことができるだろう。たとえば、知覚システムを目的論的あるいは機能的に分析することによって知覚内容に高次性質が含まれるかを検討することもできるだろうし、光や音波などの物理的入力が高次性質についての情報を担うかという情報論的観点からも問題を問うことができるだろう。もし高次性質が正しいのならば、これらさまざまなアプローチからも支持できるものであるはずである。高次説を擁護するためには、このようなさまざまな観点のもとで検討する必要がある。

しかしながら、本稿で行ったような意識に関する分析からだけでも、少なくとも次のような帰結を導くことができる。それは、私たちが日常的に「これはリンゴだ」というようなことに気づくとき、その気づきは単なる知覚に基づいた判断ではないということである。その気づきに相当する性質は、実際に知覚されているのである。

参 考 文 献

- Bayne, T. (2009) "Perception and the Reach of Phenomenal Content", *Philosophical Quarterly* 59(236): 385-404.
- Butterfill, S. (2009) "Seeing causings and hearing gestures," *The Philosophical Quarterly* 59(236): 405-428.
- Crutchfield, P. (2011) "Representing High-Level Properties in Perceptual Experience," *Philosophical Psychology* 25(2): 279-294.
- Fish, W. (forthcoming) "High-level properties and visual experience," *Philosophical Studies*.
- Gibson, J. J. (1979) *The Ecological Approach to Visual Perception*. Boston: Houghton Mifflin. (1986, 古崎 敬訳, 『生態学的視覚論』, サイエンス社.)
- Gibson, J. and Gibson, E. (1955) "Perceptual learning: differentiation or enrichment?," *Psychological Review* 62, 32-41.
- Humphreys, G. W. and Riddoch, M. J. (1987) *To see but not to see: A case study of visual agnosia*. London: Erlbaum. (1992, 河内 十郎, 能智 正博訳, 『見え

知覚はどれだけのものを捉えられるのか

- ているのに見えない？—ある失認症者の世界』, 新曜社.)
- Macpherson, F. (2006) "Ambiguous figures and the content of experience," *Nous*, 40(1): 82-117.
- Macpherson, F. (2011) "The Admissible Contents of Experience," in K. Hawley and F. Macpherson (eds.) *The Admissible Contents of Experience*. Wiley-Blackwell.
- Michotte, A. (1963) *The Perception of Causality*. New York: Basic Books.
- O'Callaghan, C. (2011) "Against hearing meanings," *Philosophical Quarterly* 61(245): 783-807.
- Prinz, J. (2006) "The content of sensation and perception," In T. Gendler & J. Hawthorne (eds.), *Perceptual experience*. Oxford: Clarendon Press.
- Russell, B. (1941) "Visual object agnosia with special reference to the gestalt theory," *Brain* 64(1): 43-62.
- Shannon, R.V., Zeng, F.G., Kamath, V., Wygonski, J., and Ekelid, M. (1995) "Speech recognition with primarily temporal cues," *Science* 270: 303-304.
- Siegel, S. (2006) "Which properties are represented in perception?," In T. Gendler & J. Hawthorne (Eds.), *Perceptual Experience*. Oxford: Oxford University Press. 81-503.
- (2010) *The Contents of Visual Experience*. New York: Oxford University Press.
- Siewert, C. (1998) *The Significance of Consciousness*. Princeton: Princeton University Press.
- Zeki, S. (1993) *A Vision of the Brain*. Wiley-Blackwell, (1995, 河内 十郎訳, 『脳のヴィジョン』, 医学書院.)
- 柏野 牧夫 (2010) 『音の世界のイリュージョン』, 岩波書店.
- 力丸 裕 (2005) 「劣化雑音音声の聞こえ」, 『日本音響学会誌』 61(5): 273-278.